「マイノリティの文学」を担当して

石﨑　等

Ⅰ．《立教科目》の中の「マイノリティの文学」

2005年10月，パリでユネスコ総会が開かれ，「文化的表現の多様性を保護し促進する条約」（通称，「文化の多様性に関する国際条約」）が，アメリカ・イスラエル2国の反対があったものの，圧倒的多数で採択された。この条約成立には，9・11事件のあった2001年，ユネスコ総会が「文化の多様性に関する世界宣言」を決議したことが背景としてあった。世界の潮流は，一部地域の政治的な対立抗争が解決されないという現状があるものの，人類にとって，他者への寛容と文化の多様性が不可欠であることの共通した認識に向かいつつあることを示すものだ。

「文学と人間」「文学と社会」など，多彩に展開していたかつての全学共通カリキュラムを長年担当し，その後，「文学」科目が大幅に縮減され，2001年度に創設された《立教科目》の一つである「マイノリティの文学」を5年間に亘って担ってきたが，それも今年度を以って終講となる。2006年度からは，《立教科目》の文学科目は「江戸と文学」「乱歩再発見」の2科目限りとなる。減った「マイノリティの文学」2コマ（そのうちの1コマは，法学部の山田久美子さん担当の「アイルランド文学」）は別の科目に再編されるのであろう。科目の栄枯盛衰を嘆いてみても始まらないが，「文化の多様性」の保護と促進や「魂の領域だけは市場原理に任せない」（i）という国際的な価値観のコンセンサスが今後の国際社会においてますます重要になることを考えると，《立教科目》における文化的な科目のさらなる充実が必要となるのではないだろうか。

「マイノリティの文学」はもともと固定化されていたわけではなかったように思う。何年間か試行錯誤しつつ，科目の再編と充実が予定されていたように思う。だから仕方がないのだが，そうだとしても，八方に広がり，多彩化した《立教科目》の中にあって文学という名のつく科目が縮小の方向性にあるという印象は否めない。しかし《人権》を重視する大学の方向性に相応しいユニークな科目といえた。担い

手がいれば，一層グローバル化に向かいつつある現代世界にあって，「文化的表現の多様性」が尊重され，人類の叡智が真剣に問われている現在の状況を考えるとき，どこの大学にあってもよい科目といえるだろう（決して多い受講者とはいえないが，f-Campus制度を利用した他大学の学生も毎年いた）。《マイノリティ》に関する諸問題は，国家と国家，民族と民族との間に存在するだけでなく，われわれの身近に存在する課題でもあるからだ。

文学作品は，政治や歴史認識など大文字のレベルとは違った角度から，「文化の多様性」そのものを問いつつ，そうした問題性の両面を具体的に明らかにする。ある作品は，自民族中心主義（エスノセントリズム）やウルトラ・ナショナリズムに囚われていて，《マイノリティ》の深刻かつ醜悪な問題を不用意にさらけ出し，反面教師としての歴史性が刻印されている（ii）。あるいは，国家によって信じがたい政策が長年に亙って《マイノリティ》といえる人々の自由を拘束し苦痛を強いてきたことの実態がヒューマンな視点からリアルに表現されている。そのような問題系に具体的に迫るには文学作品は格好の教材といえるだろう。これは何も文学作品を通して，自虐的に自己像をトレースすることではない。そうではなく，他民族の文化・宗教について寛容に接し，自己の絶対性の虚妄を自覚する視点を獲得するばかりでなく，多少，政治的かもしれないが，自己像を他者からの不当な眼差しによる侵害から守るものとしての他者像を積極的に構築するための叡知でもあると考えなければならないだろう。そうした視点をたえず所有していなくては，立ち行かないことは目に見えているからだ。

2005年度の学生レポートの中に，ゼミナールで抽象的な政治論議をいくら重ねてもなかなか分からなかった問題点が文学作品を通してとてもよく分かったという感想が記されていた。学問の質が違うから，どちらがどうだということではない。文学作品が政治や歴史を包含し具体化している面があるがゆえに親しみやすいという点があるということだ。極端にいえば，現代世界に生きるわれわれの知恵の大半は，天才的な小説家・詩人たちの創造物の中にあるといっても過言ではないだろう。

II．講義に入る前に実施（9・22）したアンケートから

○《マイノリティ》一般について

アイヌ民族21，心身障害者10，在日外国人（外国人労働者，他国籍者）7，被差別民6，先住少数民族一般（アボリジニ，ネイティヴ・アメリカン，クルド人など）6，在日コリアン5，選挙における少数政党5，同性愛者4，女性への偏見3，沖縄2，難民2，高齢者2，以下，各1（移民，性同一性障害，ハンセン氏病患者，ホームレス，共産主義者，左利き人間，未成年，こ

ども，事故で肉親を失った遺族，情報化社会に乗れない者，アメリカ社会における黒人，権力を持たぬ者，オタク・アキバ系，一般的な弱者，など）

○《マイノリティの文学》について

島崎藤村『破戒』3，小林多喜二『蟹工船』『母』，芥川龍之介『鼻』，金城一紀『GO』，『ごくありふれた在日韓国人』，『ブラッディ・マリー』，映画『エレファントマン』などがそれぞれ1。

以上の回答は，重複しているものを含んでいる。授業以前に見られるこうした傾向は，前年度実施したアンケートとほぼ変わらない。また，解答できない受講者がかなりの数いたことも共通している。

国連人権委員会による被差別部落・アイヌ民族・在日朝鮮人・外国人労働者などについての調査報告書を国内非政府組織（NGO）71団体が評価する新聞記事（iii）は，依然として陰に陽に《マイノリティ》に関する人権侵害や差別の実態が社会の中に重く存在していることを物語る。

学生たちの回答の多くは，自己の周辺を見渡し身近かな《マイノリティ》に関心を持っているが，《マイノリティ》や《差別》問題の歴史的社会的背景にまで深い関心を懐いているかどうかは，アンケート用紙では見えてこない。しかしそうした問題に無関心でないことは明白である。しかし下線部のように，《マイノリティ》の解釈を拡大してしまったものもないわけではない。

ところが，授業内容に沿ったかたちで同様の課題を課すと，以下のように多彩な変化を見せる。

○《2005年度学期末　学生が選んだレポートのテーマ》

アイヌ（民族・文化・文学）23，『アイヌ神謡集』と知里幸恵14，『GO』8，在日コリアン問題5，金史良『光の中に』5，梁石白（『血と骨』『パッチギ』）5，マイノリティ一般4，マイノリティ文学論4，幸田露伴『当紛々』4，ジェンダー・マイノリティ（と女性文学，尾崎翠1を含む）4，湯浅克衛の文学と『カンナニ』3，つかこうへい『娘に語る祖国』など3，『破戒』2，池澤夏樹『静かな大地』2，長見義三の文学（『ほっちゃれ魚族』『アイヌの学校』）2，『蟹工船』と『海に生くる人々』2。

以下，1は，高浜虚子『朝鮮』，佐藤春夫，秋田雨雀『アイヌ族の滅亡』，鶴田知也『コシャマイン記』，宮本百合子『風に乗って来るコロボックル』，張赫宙の文学，李恢成『伽耶子のために』，金鶴泳論，『苦海浄土』，違星北斗，金時鐘，三島由紀夫『金閣寺』，『ガリヴァー旅行記』，『アンクル・トムの小屋』，フォークナー『乾燥の九月』，トニ・モリスン『ビラヴド』，乙武洋匡『五体不満足』，日本の同性愛文学，在日朝鮮人文学一般，中国語の日本文学，ハワイ日系文学，アメリカ黒人文学，琉球文化，黒人文化，アボ

リジニの神話，中国少数民族，障害者問題，ハンセン氏病，ユダヤ人問題，サハリンについて，セクシュアル・ハラスメント，カルチュラル・スタディーズ，ヤクザ論。

レポートの多くは，授業のたびに配布した講義内容・プリント資料を踏まえており，最初の授業時にとったアンケートのうち，下線を引いたようなものは大幅に後退していることが分かる。『アイヌ神謡集』は岩波文庫，『光の中に』は講談社文芸文庫，『GO』も文庫本化されていて入手しやすいし，『血と骨』『パッチギ』は映画化されたことが大きい。『カンナニ』は授業で扱ったが，容易に読めないことが少ない原因だろう。池澤夏樹，長見義三も授業で紹介はしたが，なかなか渋い選択だ。

しかし，テーマとして一人しか選ばないものの中には，《マイノリティの文学》の授業に相応しくないものがあり（たとえば，アウトローである「ヤクザ」など），その原因は，受講日数が極端に少ないための情報不足か課題を勝手に取り違えているからだ。敢えて《人権》や《差別》に反発して変化球を投げたわけではないだろう。「授業内容に沿った」という要求は無視され，自分の関心あるものを選択している。中には，別の授業で摂取した知識を使ったものではないかと思わせものもあった。

Ⅲ．変容する現実の動きを授業にいかに反映させるか

シラバスを書いた後，自分の経験や専門領域に関する新たな情報と学問の進展をどのように授業に反映させたらよいであろうか。つまりシラバスの若干の変更である。この点については，なるべく避けたい悩ましい問題だが，授業全体に関わってくるならば，杓子定規に考えずに，学生の了解を得て〈現在－考えている－こと〉を可能な限り反映させるべきだと思われる。今年は，自分が見聞した経験を導入授業の中に敢えて割り込ませ，「移民とNative Hawaiians」の問題について率直に語ってみた。「文化の多様性」を考える格好の話題という認識があったからだ。

2005年の夏，私は所用で5日間，アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島にいた。離島する2日前，民営の非営利団体が運営するBISHOP MUSEUMで開催中の“Journey with a King／Japan Hawaii：Building Bonds Across the Pacific”（王様と一緒の旅：日本とハワイ：太平洋を渡って築かれた絆）展を観た。BISHOP MUSEUMは，Native Hawaiiansとポリネシア文化を中心とした優れた博物館であり，展示物に興味をそそられたばかりでなく，Native Hawaiiansの娘たちが演じるフラダンスの原型を鑑賞することができたことも旅の楽しい思い出になった。

多くの研究者や学芸員をかかえるその博物館で，Native Hawaiiansと日本との関係をテーマにした小さな展覧会が開催されていた。私たちには一人の日系女性のドーセントが付いて日本語で説明してくれた（博物館の案内も沖縄出身の日本女性がしてくれた）。展示ならびに帰国してから得た知識で，日本とハワイの友好関係ばかりではなく，日本人移民の深刻な排斥問題があったことに興味を懐いた。

元年者（がんねんもの）と呼ばれる日本人120人余が「契約移民」としてハワイに渡航したのは1868年。そして1885年には，第一回「官約移民」927人が横浜を出発している。ところが，1893年，約100年間続いたカメハメハ王朝が消滅，それ以降，日本のハワイ移民政策は曲がり角を迎える。1897年，ハワイ到着の日本移民が手続き上の不備で上陸不許可となり，本国に送還されるという事件が起こった。駐ハワイ公使の軍艦派遣要請，ハワイ外相への抗議，賠償金75000$の獲得，星亨駐米大使によるアメリカ合衆国のハワイ合併阻止運動など，政治的抗争の果てに，1898年，ハワイ諸島はアメリカに合併される。現在，ハワイの日系人は国会議員を送り出すほどになっているが，移民草創期，《マイノリティ》である日系人の体験は《差別》以外の何ものでもなかった。

短期間で，《Melting pot》といわれるハワイにおけるアメリカ合衆国という多民族国家の統合の問題ならびに階級社会の矛盾の一端も体験したことはしたが（ホテルに向かうカハラ・アヴェニュー両側に広がる高級住宅群への，ドライバーの非難めいた言葉など），それは措くことにしよう。ただ移民の話は，ワイキキの浜で遊び，免税店へ買物に行く観光のイメージでハワイを見ようとすることに躊躇いを抱かせる。そこまで踏み込んで講義はしなかったが，聞く耳をもつ学生はいたに違いない。帰国直後，アメリカ・ニューオーリンズ東部を襲ったハリケーン「カトリーナ」の被害と救出をめぐる《差別》の実態は，たまたま読んでいたフォークナーの短篇小説集とシンクロして多民族国家の統合の理念の難しさを教えてくれた（レポートに『乾燥の九月』を選んだ学生がいたことは救いだ）。

もう一つは，ホテルを離れる朝，トランクを取りに来たアジア系の労働者に荷物を渡した後，「ホノルル・アドバタイザー」紙（August 7, 2005）の「複雑な論争は学校入試と人種問題へと発展／ハワイ人がKamehameha Schoolsを支援」という記事（リーチ・デリック記者執筆）を見たことであった。紙面には，Native Hawaiiansの象徴ともいえる旗をもち上半身裸で抗議する若者たち，涙を流して訴える女性の写真が掲載されていた。カメハメハ・スクールの入学条件は，タクシーの運転手から聞いたところでは，先住民の血が8分の1流れていれば優先的

に入学が許可されるらしいが，そうした教育条件をめぐって社会問題化したらしいのだ。記事のあらましは以下の通り。

8月3日，第9回アメリカ連邦控訴裁判所は，カメハメハの入学政策（制度）を無効とした。ハワイ先住民族学生のために，排他的で好都合なその規則は，個人の平等を保証する連邦市民権のもとでは，不法の人種差別であるという裁定であった。2対1の判決が下った法廷は，カメハメハの入学政策がハワイ先住民の教育と社会経済上の不利益とは逆の必要性をもったものであり，根拠ある積極的行動をともなったプランであるというカメハメハ側の論拠を却下したものであった。

カメハメハ・スクールが直面している社会的現実は，アメリカが理念の一つとしている多文化主義が必ずしも絶対的なものではないことを露呈した。彼らの抗議行動は，民族としての記憶——マジョリティの社会の中で，自分たちの言語・風俗・人情・習慣を尊重するゆえに，〈法〉と〈命令〉を内面化することができないことを示すものであるだろう。彼らは，自分たちが置かれている状況改善のために〈正義〉と別の〈法〉の実施を要求したのであろう。

こうした問題提起は，日本におけるアイヌ民族の存在にも通底している。《マイノリティ》や《差別》の問題が，《人種》《民族》《国民》といった入りくんだ歴史や記憶と密接に結びついており，そのことを認識し，人種や文化の対立を批判的想像力によって克服することなくして，われわれの未来は切り拓かれないことを喚起したかったからである。

最後に，今年印象に残ったエピソード一つ。出席票の裏に一学生がこんな感想を書き記していた。

> 自分は，他大学を一度卒業して立教大学に編入した者です。入学してまず，おどろいたのは，全カリの充実さでした。知的欲求を常に刺激する授業の数々が自分を興奮させました。その中で「マイノリティの文学」を受講したのも自分の知らない文化，知識，歴史があることにいたく感動し，そして誰もがその本質を問わないか，関心を向けそうにない分野にでも授業をひらき学問しようとする立教の姿勢に感動したからです。自分は来年から，広島で教師をして働くことになっています。立教で学んだ「知」は一生の宝物としてケンサンしていこうと考えています。
> ……講義で学んだ「マイノリティの文学」から見える日本の姿，存在を授業で生徒達に伝えていこうと思っています。本当にありがとうございました。

S・Y君の活躍を祈念するとともに，全カリの将来にますます期待したい。

注

i）服部英二「魂の領域に市場原理を認めず」（『毎日新聞』夕刊，2006.2.28）

ii）山中峯太郎『民族』（1940・11，同盟出版社）。アイヌ民族に対する無理解を示す小説の極北。

iii）「国内のＮＧＯ71団体／差別撤廃へ措置求め声明」（『朝日新聞』朝刊，2006.3.8）

（2006/03/13）

いしざき　ひとし
（元・本学文学部教授）